

労働者福祉中央協議会会長

笹森清氏のご挨拶



遅くまで残られた精鋭の皆さん、こんばんは。やはりこういう雰囲気になると話す方も気合が入るもので、特に今の永戸さんの挨拶を聞いていてだんだん労働運動や市民運動をやるような気分になり、そのような中でお話できることを心から感謝をしたいと思います。

10分時間をいただいておりますが、いくつか想いのたけを、そして今永戸さんが「労福協（労働者福祉中央協議会）に入れていただきたいということをお話をしている」と言われたけれど、出来れば共同戦線を張って、

これからの日本の市民生活、働く人の生活、それに対するいろんなサービスの提供の仕方と一緒に考え、一緒に行動出来ればいいなと思っております。具体的な相談については年明けまでにいろいろなことをお願いをしたいと思います。

組合員との対話から見えてきた連合の方向性

昨日、中央労福協の年次総会がありました。私は連合会長と兼務していたものを、今度は専務ということで会長に就任させていただきました。その1回目の仕事は今日、静岡労福協での講演で、具体的な県の活動をどうしていくか相談をするという、地方まわりを始めました。私の連合会長時代の活動を承知している方は「そうなのか」と思いいなるかもしれませんが、私が連合会長を2期4年やっている中で、「アクションルート」と名づけて、パート1とパート2の展開をしました。

パート1は全国47都道府県をまわり、いろんなジャンルの人と話をし、その話に基づいて運動の方向性を見つけたいという想いでやった、就任直後の約1年の全国行動、そしてそのことを踏まえて、労働運動がい

わゆる「塀の中の懲りない面々」 戦後50年の運動の歴史の中にどっぷり浸かり過ぎてしまって、「闘う」という言葉を使ったり、「怒り」という言葉を使いながら、現実にはなかなかそうはならない、ということに気がつきました。

働く人たち5,300万人から見たならば恵まれた存在の、約700万の組合員が加盟するこの連合の労働組合が、どういう社会運動を展開していけばいいのか。そのことに対して自己総括をしながら、常に自分たちでは点数が合格点という内部評価をしているということに対して、世間一般の外の人たちがどう見ているだろう。このことを率直に聞いてみたいと思いました。そして極めて辛口で労働組合が嫌いだというジャンルの方々をお願いをしました。中坊公平さん、経済界では寺島実郎さん、そしてマスコミ等に出ています作家の吉永みち子さんとか、そういう方々に集まっていただいた。最初は「連合労働運動に協力するなんて、とてもじゃないけど嫌だ」と言われましたが、何のためにそういうお願いをしているのかということの説明し、合計して2年間無償で協力してもらいました。そして最終的に連合労働運動に対する評価委員会の提言というものを出示してもらいました。ボロカスに言われましたよ。「あなたたちはそれで労働運動をやっているつもりなのか」ということを指摘された。それぞれのところで自分たちは一生懸命にやっているんですよ。ところが、段々忘れてしまっていたものがある。労働運動は何だろう、市民運動であり社会運動である、そのことを自分たちだけの要求が満たされれば満足をしていたことの中

で、忘れてしまったものを取り返さないと、取り返しのつかないことになる。「そのことを具体的に展開できるナショナルセンターが連合であり、労働運動をやってみようよ」ということを今度は徹底的に組織の中に意思合わせをさせたいという想いの中で、会長2期目の2年のうち1年半を使って58構成組織との直接対話をやりました。

これは極めてハードだった。自分の組織に入れたがらない人もいますよ。中を見られたりいろんなことを言われると困っちゃうからね。だけどそのことを踏まえて始めたならば、「もっとやってくれ」というのが出て、76回の直接対話をやりました。支部長といった現場に近いに役員の人たちと「現場の組合員の人たちは、やっぱり今何かやらなければいけないと思っているんじゃないか」という想いがやっと共通のものになりました。その上で「連合の労働運動」という枠組みから逸脱をして、地域社会とどう共生をするか、そして非典型の人たちを含めたフルタイムで労働組合のユニオンに守られていない人たちとの連携をどうするのか、この運動を大きく展開をさせたいという意識が私は出来上がってきたんじゃないかと思いました。そのことが醸成されたので、今年の10月の大会で連合会長を後継者に引き継いで、退任させていただきました。

その上で、今まで労働運動を約40年間やりましたが、本当に市民との対話をつながりながら、地域社会との共生、そしていろんな意味での働く人たちの相互連帯をどういうふうに作り上げるかということで、中央労福協は最後の私のライフワークになってい

いんじゃないかという想いに駆られたんです。

中央労福協の成り立ちと協同労働

この中央労福協が出来たのが、今からちょうど55年前です。昭和20年(1945年)に敗戦になって、その5年後、極めてまだ日本が貧しい時代に、労働者に対する物資供給対策連絡協議会、略称「物対協」というのを作ったのです。その翌年の1951年に今の福祉を中心にしようということで、福祉対策協議会「福対協」に変わった。それから55年の歴史があります。この団体は、当時の労働4団体、そしてそこに参加をする労働組合すべて、そして地方で活動していくための地方労福協47、そこから今度はそれぞれを独立させて別法人格をもたせました。生活や職場の中の役割を分けていきながら高めていく運動に変えていったほうがいいだろうということで、労働金庫を設立しようという動きになり、労金ができます。そしてその次に生協連(生活協同組合連合会)がどうかこれから地域の中に溶け込んでいけるだろうということで独立させました。その上で今度は、働いている人や家族を含めた共済制度をどうするかという、現在全労済がやっている共済活動を分離させました。ということで、労働運動から本来の役割を独立的に担うための組織を作り上げていく経過が約10年間。だから今の労福協では、ナショナルセンターは一つになりましたから、連合、そして構成組織全て、さらに地方の労福協は、そこに関係する事業団体=全労災、労金、日本生協連等を含め、そしてイデオロギー等は関係がないということを前提に、

全労連に加盟する組合をこの中に入れていくということでの広がりをもたせる。

そこに今ちょうど永戸さんたちがお見えになって、この協同組合法ができる・できないは別にして、「協同労働の関係についても一つの大きな組織になっているから、一緒にどうだろう」というご相談を受けました。僕たちは規約上の照らし合わせに問題があれば規約を直すし、問題がなければ直ちに三役会に働きかけようということで受けました。今三役会にかけて、来年こういうことができるだろうと思っておりますので、その時に一緒に皆さんと進めさせていただければと思います。

今の日本社会を変えるためにやるべき事

その上でやらなければならないことに何があるだろうということですが。先ほど小泉内閣の話がありました。小泉さんが期待を抱かせた分、この反動は大きいですね。2001年の4月26日、今から4年と8ヶ月前に小泉さんが総理大臣になった。バラ色の夢を持たせてくれたわけだ。国民のほとんども、そして野党である民主党だって小泉さんと連携をとりたかったくらいだった。しかしその夢が無惨にもぶち壊された時には何が残っているのか。もう“公助”はどうにもならない程崩れました。そして自立をしていくという“自助”はどうなのか。これはもう限界を超えています。じゃあ後は何が残るかと言ったら、共に助け合う“共助”でしょ。これも制度としてどうなのかと言えば、社会保障制度を初めとする国の政策は完全にパンク。となれば自立でやるような

生協法とか共済法とかいろんな問題を含めてこれからどうしていくかというのを作っていかなければいけない。小泉構造改革は全部その逆を行くわけだ。

ここのところを徹底的に突いていくのは連合の仕事ではあったんだけど、私は昨日の労福協の総会で、「これから市民運動として展開をしていくためには、労働組合だからという囲いの中だけでは駄目だから、大きく広げた運動を今言ったような団体を全部含めてどう展開をするかということをやろう」と言う呼びかけをしました。これがこれからの日本社会を変えられるかどうかという大きな原点になります。その上でこの協同労働による協同組合を作らせなければしょうがないのだけれども、この「労働」というイメージを今働く人たちが持っているかどうか、徹底的にこれからつなぎ合わせましようよ。

ヒルズ族と労働者

なぜこんな事を言うのかというと、今「六本木ヒルズ族」という言葉がありますよね。あの六本木ヒルズの中には約60のITを中心とするベンチャー企業が入っています。そこで40人の平均36歳の若手社長から、私が連合会長を辞めて2週間目に「講演をやってくれ」と頼まれて出かけました。どんな勉強会を彼らがやっているかというと、毎週1回夜6時から10時まで徹底的に勉強するんですよ。今までの講師は誰かかというと、私の1週間前が村上ファンドの村上世彰氏、その前がライブドアの堀江社長、その前は自民党の幹事長になった安倍晋三氏とかね。政界と役所の局長以上と流行のベンチャー企

業のリーダー、さらに大手企業の経済界の首脳も呼ばれてやっている。いろんな話を聞いてみたけど、彼ら自身が何か足りないという気がして考えてみたら、働く現場の人の話を一度も聞いたことがない。そうすると「連合会長を辞めた笹森が暇になったよだから呼んでみるか」ということになったそうです。1時間しゃべっただけで30分休憩をとって質問状が出てきた。ものすごいレベルの高い質問でしたよ。これを1時間私が説明をし、それを受けて1問1答を1時間ちょっと。これを4時間やった。勉強させられたけれども、非常に面白かった中でお互いに分かったことは何か。

彼らの頭には「労働者」という概念がないんです。具体的なやり取りをしている時に経営陣だからしょうがないと思ったので「六本木ヒルズの皆さん方の中には時間なんか関係なく仕事をやっている人がいるんだから、今ちょっと働いている社員を呼んで



くれないか」と言って4つの企業の10数人が集まってくれた。「ちょっと聞きたいんだけど、労働者という意識がありますか」と聞いたところ、全員がないんです。全員独立をして自分で経営をやっていく、という目標を持っている。

「額に汗して報われる社会を作ろうよ」これが私たちの言葉です。彼らは額に汗して報われる社会を作ろうなんて考えていないんだから。コンピューターに向かってやっていたら何十億も出てくる世界ですからね。指先だけ使えば儲かるよという世界です。だけどそういう社会の人たちが圧倒的に売れ始めた中で「労働者というのは何なのか」という事をもう一度きちんと我々自身がつかんで、その上でそういう気持ちを持っている人たちとの運動をどう展開していくのかを考えなければならない。そうでないと取り返しのつかないことになります。

規制緩和－民営化が進む中で問われていること

いま日本は完全に2極分化しました。それもついこの間まで皆が1億総中流と言っていた。その中流はサラリーマン家庭。統計上から言えば、給与生計所帯。1億2,600万国民の82.7%が給与生計、サラリーを稼いで生活している家庭なんですよ。1億人です。この人たちが、我々と一緒に仕事をし一緒に地域生活をしている、いわゆる市民なんです。この人たちが今虐げられているわけです。それはアメリカンモデルを「グローバル・スタンダード」という綺麗な言葉に置き換えた竹中さんのやろうとしている構造改革と、宮内さんがやろうとしている規制緩和

和。その最大の問題点がやっと今マスコミに取り上げられている。12月号の文芸春秋を読んでみてください。その1面トップに何が書いてあるかというと、「奪われる日本」というタイトルです。私は今年の7月の衆議院選挙に入る前から全国を駆け巡ってこのことに警鐘を鳴らしました。小泉構造改革の中でやろうとしているのは何か。

1993年、クリントン大統領が宮沢総理に出した「アメリカからの年次改革要望書」、それが12年間毎年アメリカから来るんです。お返しに日本は形だけのアメリカに対する改革要望書を出していますよ。しかしアメリカはそんなことは実行しません。なのにアメリカからの日本に対する年次改革要望書を日本政府はかなり忠実に履行するんです。なぜか。アメリカから言われたからというやりやすいから。自分たちがやってもらいたいことを逆にアメリカにお願いしてその中に盛り込んでいるという部分もある。何がその中に入っているのか。日本にあるアメリカ大使館のホームページにインターネットを接続してください。そうすると日本語で書いてある年次改革要望書が出てきますから。A4版で49ページあります。項目は3つなんです。「規制緩和はこれとこれをやりなさい。自由化はこのことをやりなさい。民営化はこれをやりなさい。やるにあたってはこういうやり方をとってください」というふうに書いてあるんですね。日本はアメリカの51番目の州ではないんです。アメリカの属国ではないんです。何でアメリカから毎年来る年次改革要望書に基づいて日本を変えていくのか。

この規制緩和・自由化・民営化によって、

日本社会のどこが痛めつけられたのかというと、2極分化をされた、悪いほうに持っていかれた庶民生活なんです。このことを助け合えるかどうかということ。そしてアメリカにさえある、弱い者に対するセーフティネットが張り巡らされた社会であるのか。その上で永戸さんが指摘をされた、「公共サービス」が地域住民・生活者にとってきちんとしたシステムになっているのか。そしてその対価が正確に払われるような存在になっているのかどうか。このことが今問われている社会なんです。それを突きつけていくことは、当然、協同労働の協同組合法ができるかどうかのところにも結論としてはなっていくし、今の日本社会を取り戻せるかどうかというところの大きなポイントになっていくのではないかと思います。

労協が日本社会の変革者へ

そういう意味ではこの労働者協同組合が働く人々の協同、利用者・生活者との協同、地域と人々の協同、という3つの協同を包含した「協同労働」という概念の中で日本社会の変革者、そして改革者になろうとするこの活動に対して、前連合会長、そして現労働者福祉中央協議会の会長としてエールを送り、挨拶にさせていただきたいと思います。